



## 校長室だより～湘南の空～

第 10 号

令和 4 年 7 月 22 日

7月14日（木）、昨年度に続き2部制で合唱コンクールを開催した。改めて合唱コンクールの準備をしてきた生徒の皆さんや担当の先生方、審査員を務めてくださった指揮者の小田野宏之さん（51回）、音楽解説者の川上薫さん（56回）、音楽評論家の青澤隆明さん（63回）に心より感謝したい。取分け、円滑な運営を実現した生徒の皆さんに拍手を贈る。

湘南は開校時から国数英などの学科ばかりではなく、芸術、スポーツの分野でも才能の萌芽のあるものを伸長する教育を大切にしてきた。また、「好きなことを見つけてとことんやってみる」という湘南高校の精神が現在の合唱コンクールの伝統につながったと考えている。湯山昭さん（26回）作曲の課題曲の全員合唱も素晴らしかった。

また、部活動についても、生徒の皆さんの活躍が目覚ましい。特にそのプロセスには目を見張るものがある。実際、本校の部活動に接し、感動で鳥肌が立ったという感謝の声が寄せられている。湘南生の姿は人々を勇気づけ、やがて世界を動かす力になるに違いない。未来に立ち向かう湘南生は確かに輝いている。

### いのち、文化を尊重し愛おしむ

7月8日（金）、安倍晋三元首相の銃撃事件が起こった。選挙期間中であり、民主主義の根幹を揺るがす事件として日本に激震が走り、世界中で大きく報道された。これからの日本や世界に不安を感じた方も多かったのではなかろうか。「東京都江東区に住む大学1年の女性（18）は選挙権を得て初めての投票だった。もともと足を運ぶつもりだったが、『民主主義の基本である選挙や一票を投じる権利がいかに大事かをいっそう実感した』と語った。」（「論戦こそ民主主義」「事件許さぬ意思を」若い有権者、権利を実感日本経済新聞7月11日）安倍晋三元首相のご冥福を心よりお祈りいたします。

日・ウクライナ外交関係樹立30周年記念事業「キエフ・バレエ・ガラ2022」として、キエフ・バレエ（ウクライナ国立バレエ）のダンサーたちが7月15日から8月9日に来日公演を行っている。実際、以前の公演と比べても、素朴な中に際立って洗練された優しく、美しいバレエだ。戦争やコロナ禍の中、公演ができることへの感謝と深い悲しみ、そして不屈の精神に裏打ちされている。葉加瀬太郎が音楽を担当した新作で、ウクライナ国花をタイトルにした「ひまわり」、1841年パリ・オペラ座初演の「ジゼル」よりパ・ド・ドゥ、同じく1856年初演の「海賊」より花園の場。そして、1907年サンクトペテルブルク貴族会館初演で、カミーユ・サン＝サーンス（1835年～1921年）の

組曲「動物の謝肉祭」第13曲「白鳥」に振り付けた「瀕死の白鳥」は今回の公演を率いるキエフ・バレエ芸術監督エレナ・フィリピエワが自ら演じ切り、本当に拍手が鳴りやまなかった。死の恐怖と向き合いながら、生を愛し、夢と希望を捨てずに舞い続ける瀕死の白鳥の精神に現在のウクライナの人々を重ねたのは私だけだろうか。

エレナ・フィリピエワはプログラムの中で次のように述べている。「私たちのバレエ芸術によって、私たちは強く破壊される事なく、無限の可能性を持っていると示していきたい」

いのち、文化を尊重し愛おしむという当たり前のことはどうしたら実現するのだろうか。考えてみたい、考えていただきたいと思う。

「あなたは世界をどう変えますか。」生徒の皆さんには引き続き理念・目標を掲げ進んでほしい。皆さんの今後の挑戦を心より楽しみにしている。

### ヤクルトの宮台康平投手

7月14日、バンテリンドームナゴヤでヤクルトの宮台康平投手（89回）が移籍後初登板し、無安打無失点2奪三振の好投を見せた。「3点を追う8回に3番手で登板。先頭の三ツ俣をこの日最速の149キロ直球で空振り三振に抑えると、続く代打・石垣を遊飛に打ち取った。最後は平田に147キロの高め直球を振らせて空振り三振に斬った。打者3人をピシヤリと抑える好投に『すごく緊張しましたが、チームに貢献したいという思いで必死に投げました。今日は抑える事ができたので、また次、しっかり抑えられるようにいい準備をしていきたいです』と胸を張った。」（スポーツ報知7月15日）

宮台投手は母校湘南を振り返り、みんな勉強にも部活にも本当に一生懸命で、全力でやっているからこそ、勉強と野球で優れた人の“すごさ”がわかり、みんなライバルで、お手本でもあって、尊敬もできる仲間だったという。

また、湘南高校、東京大学を通しての生活について「何より、勉強も野球も好きなんです。わかるようになって、うまくなるのが楽しい。（中略）自分がプロ野球選手になれたのは、東大に入って六大学で活躍できたから。そうやって逆算して考えてみると、勉強があったからこそ、選択肢も広がったと思います。」

「最も困難な道に挑戦せよ」を体現している宮台投手はこれまで多くの人に勇気を与えてきた。今後の活躍に注目したい。

[「東大だからプロ野球選手になれた」ヤクルト宮台康平が語る青春と今 | プロ野球 | 集英社のスポーツ総合雑誌 スポルティーバ 公式サイト web Sportiva \(shueisha.co.jp\)](#)

新たな挑戦を続ける湘南生は当然悩むこともある。夏季休業中も先生、仲間、ご家族、あるいは周囲の信頼できる大人に相談していただきたい。